

日加関係の

回顧と展望

日本カナダ学会会長

馬場 伸也

多くの日本人にとって、いまだにかなり未知の国カナダは、一般に想像されているよりも、遙かに大きく日本史の展開に寄与してきた。そこで日加国交五十周年を記念するにあたって、まず日本とカナダの関りを概観し、それを踏まえて、両国関係の将来を展望してみたい。

日本がオタワに公使館を開設したのは、一九二八年七月二十日であり、カナダが東京（現カナダ大使館所在地）に公使館を開設したのは、その翌年の五月二十一日のことであった。しかし、非公式の日加交渉は、それよりも更に半世紀も昔に、カナダ・メソジスト・ミッションが来日した時から既に開始されていた。

一、戦前史断片

(1) カナダ・ミッション

カナダ・メソジスト教会伝導局が二人

の宣教師、ジョージ・カックランとデー

ビッドソン・マクドナルドを日本に派遣したのは、「切支丹禁制」の高札が撤去されてまもない一八七三年（明治六年）のことであった。カナダが独自で外国伝導を開始した「事始」である。カックランは、『西国立志編』『自由之理』を訳述し、日本の近代化および自由民権運動に貢献した中村正直、第二代日本メソジスト教会監督として伝導と教会発展に尽した平岩愼保、同志社社長となり（一八九七年）、のち政界でも活躍した横井時雄らを入信に導いた。マクドナルドは、日本最初のメソジスト教会である静岡教会を創立したほか、静岡病院の顧問医として西洋医学の指導と診療にも寄与すること大であった。静岡教会からは、のちに明治期を代表する史論家、評論家の一人となった山路愛山、明治キリスト教会

最大の遺産の一つといわれる『基督教大辞典』を完成した青山学院長の高木壬太郎、北村透谷と協力して日本平和会を創立（一八八九年十一月）し、日本の平和運動の先駆者となった加藤万治等が輩出した（透谷もカナダ・メソジスト・ミッションと交渉があった）。

カックランとマクドナルドがまいた伝導の種は、その後多数の後継者を得て、東京、静岡、山梨、長野、関西一円に大きく成長していき、明治末期にはカナダからの宣教師の数は延べ百数十名にも達していた。このほか、カナダ・メソジストは日本の慈善事業や近代教育、とくに女子教育の発展にも貢献した。カナダ・メソジストが直接あるいは間接に育成した学校に、東洋英和学校、その普通科として成長した麻布中学、関西学院、青山学院、東洋英和女学院、静岡英和女学院、山梨英和女学院がある。このようにカナダ・メソジズムは、アメリカのビュリタニズムやイギリスのアングリカニズムと並んで、明治期のプロテスタント宣教をささえる三本柱の一つであった。

(2) バンクーバー暴動と日英同盟の終焉

日英同盟の終焉

カナダ人が日本へやってきたのとは逆に、日本からカナダへかけていく人々もいた。移民である。移民が激増した日は日清・日露戦争のころからで、一八八九年にはおよそ三百余人にすぎなかったブリティッシュ・コロンビア州（以下B・C州）内の日本人は、一九〇三年には四千五百九十七人に達していた。一九〇七年には二千四十二人、一九〇八年には七千六百一人もの入国者があった。そ

こで突発したのがバンクーバー暴動事件である。

一九〇七年九月七日夜、「アジア人排斥同盟」主催の大演説会に、約五千名の聴衆が市役所講堂につめかけた。閉会后も興奮さめやらない白人労働者、無頼漢らは、群をなして中国人街、日本人街を襲撃し甚大な被害を与えた。事件はカナダ政府が被害者に賠償（約一万ドル）して一応の解決をみたが、さまざまな波紋を投げかけずにはおかなかった。

まずカナダ国内では、以前からあったB・C州とオタワ中央政府との対立をますます複雑化したこと、人種問題がカナダ国内・外交政策を動かす大きな要因として把握されるに至ったこと（カナダの民族・文化的アイデンティティとしての「モザイク論」の一淵源）。国際的に



バンクーバーに着いた初期の日本人移民。